

## 学習・研究を支援するシステム

宇陀則彦

図書館情報メディア研究科助教授

はじめに

筑波フォーラムには教育のあり方や研究の活性化に関する論考が多様な観点から並んでいます。共通するのはいかに特色あるカリキュラムを構成し、学生に意欲を持って学んでもらえるかという点です。学問領域ごとに方法論が異なるのは当然としても、よい学習環境を与えることが教育・研究の効率を上げるというのはどなたも疑わないことと思います。特に高等教育においては、教員の言うことを鵜呑みのするのではなく、学生自ら考え、それぞれ独自の学問的価値観を構成していくことが求められます。では、どのような学習環境を用意すれば、学生の意欲を高め、知的活動を活性化できるのでしょうか。

私が担当する講義は、これらの諸問題を情報システムの観点から考える授業です。図書館情報専門学群においては「学術情報システム」と「ネットワーク情報資源」と

いう名前がついていますが、新しい知識情報・図書館学類では「デジタルライブラリ」という講義に集約される予定です。

### 学術情報システム

学術情報システムの講義では、1980年の学術審議会答申「今後における学術情報システムの在り方について」から話を始めます。そこには次のような文言があります。

「本来、学術情報は、高度な知的活動の所産であり、それ自体高い価値を有するのみならず、一国の社会、経済、文化の発展にとって貴重な資源である。(中略)

研究者による教育・研究活動は、我が国における知的諸活動の源泉となっているが、研究活動に際して必要な学術情報の収集と利用については、これまでは主として各研究機関または個々の研究者の活動として行われてきている。今日の学術情報の多量化と多様化の状況においては、このような個

別的な努力では十分な情報収集の成果は到底望めず、研究者の間で新しい事態に適した学術情報の流通システムの整備が強く望まれている。」

簡単にいうと、最先端の研究を行うためには、国内外の学術情報を我が国の研究者に届ける必要があるが、当時はその基盤が整っていなかったということです。答申では、学術情報システムの持つべき機能として、一次情報の収集・提供機能の充実、情報検索システムの確立、データベース形成の促進の3点をあげました。また、システムと研究者とを結ぶ窓口機能として大学図書館サービスの強化をあげています。この答申をもとに学術情報基盤が整備されたおかげで、我々はそれほど苦勞することなく研究論文や文献を入手できているわけです。

80年答申から27年、その間、学術情報システムをめぐる状況は大きく変化しました。最も大きな変化は言うまでもなく、電子化資料の増加と Web の登場です。今後、最先端の研究を維持するためには、どのような学術情報基盤を構築すべきでしょうか。興味のある方は2006年3月に公開された「学術情報基盤の今後の在り方について（報告）」をご覧ください。文部科学省のページからダウンロードできます。

## 電子図書館システム

学術情報システムは我が国全体の基盤システムとしての意味合いが強いですが、個々の大学においては学術情報システムのノードというべき電子図書館システムの高度化が急務です。2005年度から2006年度にかけて私は附属図書館のシステム更新に関わりましたが、そのときに強く主張したのが、「館」の情報発信から情報資源の提供にシフトすることでした。図書館のページといえば、お知らせと開館時間が載っていて、蔵書目録（OPAC）が検索できるものと思っている方が多いかもしれません。しかし、学術雑誌の大部分が電子ジャーナルになり、多くのデータベースが利用できるようになった現在、これら情報資源の利便性を高める方向でデザインしなければ、「電子図書館」とは言えません。つまり、「館」の補助ツールといった消極的な位置づけではなく、電子図書館でなければできないことをやるべきです。

海外の大学図書館では、サービス技術の開発に余念がありません。また、新しいシステムを作ったら作りっぱなしにせず、利用者の声を徹底的に聞き、システムにフィードバックしているそうです。

電子図書館システム構築の難しさは世界共通です。問題の本質はテクノロジーにあるのではなく、人とシステムの相互作用に

あるのだということはだんだんわかってきました。最近では、図書館システムだけ考えるのではなく、学内の他のシステムと有機的に連携し、学生の学習生活全般を大学のシステム全体で支援する方向にあるそうです。そのなかで図書館は「電子の図書館」と「場としての図書館」の両面からサービス強化をはかり、組織の中での価値を高めようとしています。

## Learning Commons

場としての図書館といえば、Learning CommonsあるいはInformation Commonsといった考えが最近のトレンドです。冒頭で述べたとおり、大学においては、学生自ら考え、それぞれ独自の学問的価値観を構成していくことが求められます。そのためには思索のための道具と学習空間を整備する必要があります。貧弱な学習環境では高度な思索はできません。

Learning Commonsとは学習に必要な道具を居心地のよい空間に配置し、独習やグループ学習を専門スタッフのサポートのもとに行える環境のことです。空間デザイン、ITデザイン、そしてインテリジェントホスピタリティを融合させた新しい学習環境です。ただし、うまく機能させるのは相当難しく、形だけ真似ると、単にテーブルとパソコンが並んでいるだけという状態になり

かねません。うまく機能するかどうかは、いかに優秀なスタッフを揃えられるかにかかっているといえるでしょう。

Learning Commonsは学内のどこにあってもよいし、複数あってもよいのですが、何らかの形で図書館は必ず関わります。なぜなら学習に必要な情報資源を一手に担っているのは図書館だからです。

## 講義のねらい

講義では、学習・研究を支援するシステムについて、その背景から社会的意義、技術的な話から利用者の特性、Googleの戦略から情報資源のマネジメントなど、幅広く話をします。話が次から次へととぶので、ぼーっと聞き流していると単なるお話にか聞こえません。しかし、勸のよい学生はちりばめられた話題から本質的なトピックをつかまえ、的確にレポートを書いてきます。ときには私が驚くような鋭い洞察を示すこともあります。

私がこの講義で学生に望むのは、複眼的視野でシステムをとらえることです。そして、いつかは文系の内容を理系的思考で、理系の内容を文系的視野で考えられるようになることです。私の講義は文理融合のほんの一例ですが、知識情報・図書館学類が文理融合を謳うのはこういうわけなのです。(うだ のりひこ/デジタルライブラリ)